南アフリカ Voice of Free South Africa　1994年9月

自由の声

No. 6　発行　アジア・アフリカと共に歩む会
Published by
Together with Africa and Asia Association

会の活動報告

南アに移動図書館車が走り回る日を楽しみに……

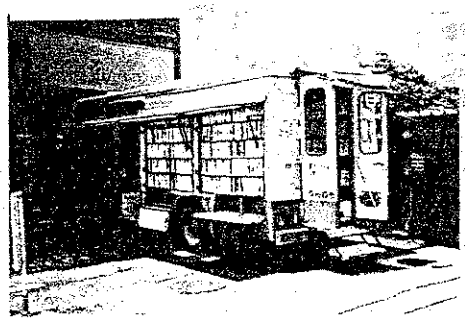
猛暑に水不足の今夏もようやく峠を越え、朝晩は少ししのぎやすくなってきました。大汗かきの筆者にとっては塗炭の苦しみの暑さもただ一つビールの味の向上には役立っているようです。

南アの全人種による総選挙が実施されてから早4ヵ月が経過しました。数世紀にわたる不自然な状態が短時日に修整されるとは思いませんが、市民の生活のレベルでのこの歴史的な選挙の結果がどう現われているのかを知りたいところです。めっきり減った南ア関連の日本の報道の姿勢を今一度問い直してみる必要があると考えるのは私一人ではないでしょう。

前号でこの会のメンバーの下谷さんの南ア訪問報告記にあるとおり、限られた図書を有効に利用できる移動図書館（バス）の有用性がクローズアップされてきました。浦和市役所の石塚さんの助言をたよりに用途廃止の図書館車を譲って戴く道を模索し始めました。輸出に関する国内の煩雑な手続き、南ア側の輸入規制の特例のお願い、さらには車の一時保管場所の確保等を同時に進めなければならない私たちにとっては大変なプロジェクトです。しかし会員各位の多方面にわたる知識と能力を併せてチャレンジする価値のある仕事です。幸いなことにカナダのボランティア組織と連絡が取れ送料さえ負担すれば、どんなジャンルの本でも現地へ送って戴けるという力強い申し出も既に受けていますので、全ての歯車が噛み合い始めれば、内容の伴った立派な移動図書館車が広大な南アの大地を走り回り、知識に飢えた人々の心を潤してくれる夢もあながち、夢ではなくなります。

皆様には物心両面でのご支援を再度お願い申し上げます。

（浅見克則　記）



I MISS SOUTH AFRICA!

住みたくなってしまった国

前ＡＮＣ東京事務所スタッフ
平林 薫

６月末のＡＮＣ東京事務所閉鎖後、７月１９日からやく１ヵ月間南アを訪問しました。初めての訪問なので期待と不安でいっぱいでしたが、選挙が終わり新しい社会に移行しつつある現地は、想像よりはるかに穏やかで平和な印象を受けました。人々は口々に"変化には時間がかかる。一人一人が努力しなくては"といい、新政府に期待しつつも、すぐに生活がよくなるわけはないととても冷静でした。ただ４０％以上いると言われている失業率はジョハネスバーグの街中やソウェトのタウンシップでは一目瞭然です。けれども人々にそれほど悲壮感がないのは同じような境遇の仲間が大勢いるからでしょうか、それとも国民性なのでしょうか。制度として無くなったアパルトヘイトですが生活全般における不公平は簡単に消え去るはずはなく，新政府はＲＤＰ(再建開発計画)を中心に政策を進めています。中でも重要なのは住宅、雇用、土地、教育で、公共事業の推進による雇用の拡大や土地の再分配等、時間とお金のかかる作業ばかりです。特に教育は国の将来に関わる問題なので早急に改革していかなければなりません。"すべてのこども達に１０年間の無償の義務教育"が柱となっています。

８月の初め、野田さんから紹介をいただいたダーバンのＥＬＥＴ(English Language Educational Trust)のオフィスを訪問しました。あいにく所長のオーグル氏は出張中でお会いすることができませんでしたが、スタッフのザマングウェさんがオフィスを案内してくれました。コーディネーターの方々が口々に"日本からの本は有効に使わせてもらっています。たいへん感謝しています。"と話していました。また今回計画されている移動図書館についてもとても喜んでいました。ダーバンから車で１時間半くらいのカートリッジという町から更に奥に入ったブランゼニという村のムデファ高校をスタッフのスワジさんと訪問しました。この村はチーフムラバの管轄下にあるとのことです。９Ｂクラスのシムピウェ先生はＥＬＥＴのワークショップを受け、この日はＥＬＥＴ方式に則った英語の授業をしていました。生徒数55~56人にとってはとても狭い教室の中での熱気あふれる授業風景でした。授業が終わると、私は生徒たちに一斉に囲まれて質問攻めに合い、皆で一緒に写

３月にＥＬＥＴを野田が訪ねた際
ザマングウェ(ELETスタッフ)と野田

ダーバン近郊の高校にて（中央 筆者）

真を撮ったり握手をしたり、短い時間でしたが楽しく過ごしました。皆、明るくて人懐っこく、忙しい現代の日本人が失いかけているものを彼らはもち続けているような気がします。美しい風景と素朴な人々に出会ってとてもあたたかい気持ちになりました。

ンデベレ族の人々が住むホームランド、クワンデベレを訪問した時は、いきなりやってきた日本人に少し戸惑った様子でしたが、彼女たちのアーティスティックな才能を十分に見せてくれました。男性は皆都会へ働きに出ており、残っているのは女性と子供ばかりです。家の壁に施すとてもユニークな幾何学模様のペインティングは、その家のお母さんの仕事だそうです。高校生のマーシーはわざわざ民族衣装をつけてくれました。ビーズで編まれたカラフルなアンクレットを私もつけさせてもらいましたが、やはりお祭りの衣装だけあってあまり機能的とはいえません。最近は時間的にも物資的にも乏しいため、なかなかペインティングができないと聞き、"ンデベレの人々にペンキを送ろう" なんていうプロジェクトもやってみたいなと考えています。

ジョハネスブルグのタウンシップであるソウェトは1976年の学生達の蜂起で有名ですが、地域がいくつもに分かれており想像以上に広いのに驚きました。場所によっては立派な家もあったり、スクウォッターキャンプもあったりします。確かに町の中はごみだらけで、道路は埃っぽく、人が右往左往し、平均的に家は粗末な造りです。でも私が気に入ったのは人々の生活や息づかいが感じられることで、郊外の白人の居住区では人の姿すら見られませんでした。また、ソウェトではどの家も中をさっぱりときれいにしていてとても居心地がよく、突然の訪問客をたいへん歓迎してくれました。町の中心部にあるコミュニティーセンターでは放課後に子供たちを集めてダンスや歌のレッスンをしています。特に女の子達を町の中でふらふらさせないという目的があるとのことです。指導している先生はほとんどボランティアですが、熱心に地域のために働いています。

彼らの飛び抜けて優れた才能であるアート&ネイチャーの分野において何らかの形で協力、支援したり、あるいはビジネスとして成り立つことはないだろうかと思案中です。このようなことは現在の南ア全体の大きな変化から見れば些細なことかもしれません。しかし黒人コミュニティーにとって、すべてマイナスから自分たちの力で始めなければならないのです。もしかしたら大きなプロジェクトからはずれてしまう人々やコミュニティーもあるかもしれません。やはり今こそ草の根の支援、交流が大切で必要なのだと痛感しています。これからも引き続き南アの人々、特に子供たちの教育のためのご支援をお願いいたします。南アの素晴らしさは何といっても"人"だと思います。あれほど長い間つらく苦しい思いをしてきたにもかかわらず、他人に対する思いやりや明るさを失わない人々。そんな人々と共に歩み学び合っていきたいと思っています。

ンデベレ村の高校生マーシーと筆者

新生南アフリカは
マイナス地点からの苦難の道

全人種参加の歴史的な総選挙が終わり、マスコミから流れる情報量は極端に減少している。「ともかくアパルトヘイトは終わった」という気持ちから南アへの関心が急速に薄らいでいくように思われる。

しかし、あの選挙報道の時にくりかえし述べられたように、すべてはこれからなのである。新生南アフリカはゼロから出発するわけではなく、負の遺産を引き継いで歩き始めているのである。

例えばアパルトヘイトによって否応なく貧困や政治活動に巻き込まれた子供たちは、一生の内の学習に適した時期をすでに過ごしてしまった。ここでは生きていくために売春せざるを得なかったケースを載せておこう。

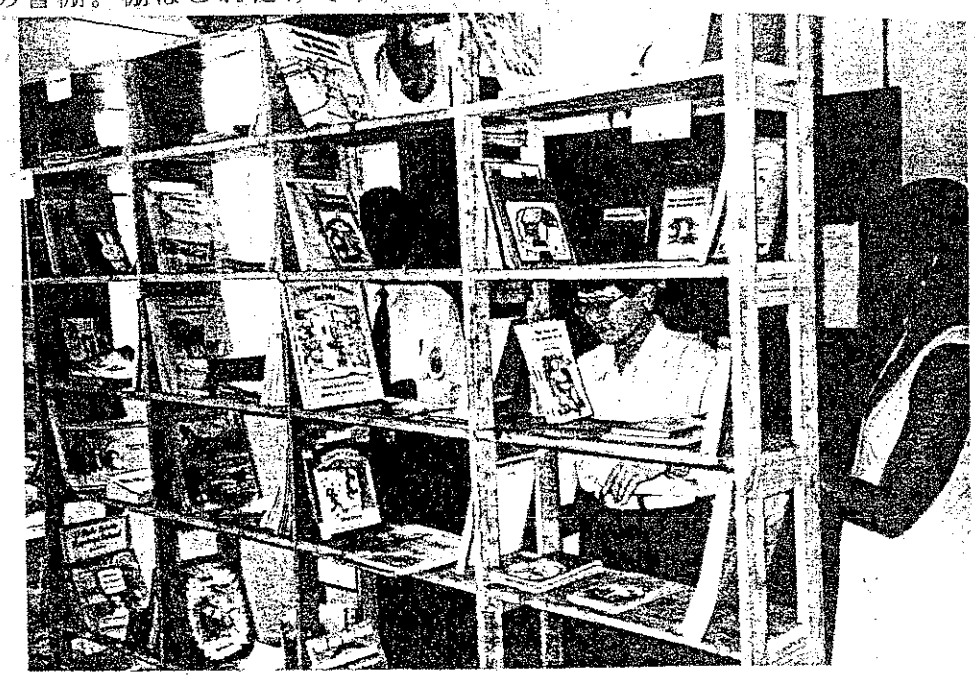
あんちアパルトヘイトニュースレター1994 5、69号に登場するプリシアス（仮名）20才ポートエリザベス生まれ、コサ、父親は彼女が幼い時に亡くなった。３人兄弟の末っ子。母親の収入だけでは学費が間に合わず、学校を途中で退学。5年前に家出をし、友人の紹介で今のホテルに住みつく。客が取れない時は３０ランド（日本円にしてたったの900円）で性を売ってしまう。「夢を聞かせて」という質問に対して

「頭を低くして手で顔を覆い考え込んだ。しばらくして…『なんだかわからない。いろいろ迷ってしまって。わからない。ただもう一度学校に戻って勉強したいって気持ちはあるわ！』」

私たちの本がプリシアスの手元に届くこともあるだろうか。本を送ることは社会変革などの上で速効性はない。しかしこれからの新しい南アの国造りの長い道のりの中でボディブローのような役割を果たしていくことを信じている。

（下谷房道 記）

３月南ア訪問時のスナップより
1500人のデベトン小学校の図書室の書棚。棚はこれだけです。



『マリーの選択』（文芸春秋社刊）の著者佐保美恵子さんの講演会開かれる

去る６月１９日、アジア・アフリカと共に歩む会の講演会がフリーライターの佐美恵子さんを招いて開かれました。佐保さんは1958年生まれ。ファッション雑誌の編集者などを経て現在フリーライターとして活躍中です。

佐保さんと南アフリカとの出会いは渡米中ブロードウェイで南アのソエト蜂起を描いたミュージカル「サラフィナ！」を見たのがきっかけ。舞台が終わっても涙があふれてしばらくは席を離れることができなかったという。

「黒人の若者がなぜあんなにも輝いて見えるのだろうか、南アという国はどんな国なのだろうか、彼らの生きる社会を見てみたい。」そうした思いを抱いて帰国し、現在夫である写真家の奥野安彦氏らと知合ったことにより、共に南アを訪れることになるのである。そして南アで著書『マリーの選択』の主人公マリー・オーデンダールという女性を知る。

マリーは南アの平凡な白人家庭に生まれ、アパルトヘイトに何ら疑問を抱くことなしに育つが、60年代末にアメリカへ留学した彼女は外から、南ア、そしてアパルトヘイトを見ることによって次第に問題意識に目覚めるようになっていったのである。南アに帰国してから黒人男性と恋におちいり、一緒に暮らし始めるのだが、当時は背徳法や雑婚禁止法などで、異人種間の結婚はもちろん、男女関係も法律で禁止されていた。そうしたアパルトヘイトの真っ只中にあって「自分の気持ちに素直に生きていきたい」と彼の子供を産み、正式に結婚もしている。夫は政治活動家だったために何度も投獄され、マリーが最初の子供を産んだ時も彼は獄中だった。

学生支援課のオフィスで仕事中のマリー。彼女は仕事のできる女性として大学でも注目されている

マリーの前向きな生き方は南アフリカに住む多くの黒人たちの持つエネルギッシュな生き方と共通するものであった。５年半の間、マリーを見つめ続け、南アフリカに惹かれていった一人の女性、佐保美恵子さんの目を通して彼女の人生は語られる。

４月27日午前０時、新しい南アフリカが誕生した歓喜の瞬間を佐保さんはマリー夫妻と共に迎える。まさにアパルトヘイトの苦しみ、怒り、悲しみそしてそれを乗り越えた喜びの息遣いを共に聞くようなお話であった。

（松本富美江　記）

次男ンツィケレロにおやすみ前の絵本を読んであげるマリー。彼は1990年、マリーの両親の死の直後に生まれた

写真はコスモポリタン94．8．20より掲載

＜新刊紹介＞

「わたしは歌う」ミリアム・マケバ自伝

福音館　　1900円

３１年間の国外追放に屈することなく、アフリカの魂を全身で表現しながら歌い続けてきたミリアム・マケバ。ひとりの女性の半生の向こうに、南アフリカの歴史と、大地に生きる人々の想いが浮かび上がります。

〈編集後記〉

◆今年３月に「アフリカ日本協議会」が発足しました。日本のアフリカ関係のＮＧＯ、研究者等がアフリカをもっとよく知り、積極的にアフリカと良い関係を作っていこう、という考えから結成したものです。アフリカに関するＮＧＯの連合体とも言えるものです。日本政府は南アフリカに２年間で　３億ドルのＯＤＡ拠出を南ア政府に約束しました。南アには５万４千と言われる大小の非政府開発組織が存在しています。政府開発援助では届きにくい小さな無数の現地のＮＧＯや社会セクターに対しては、この膨大な政府援助資金の何割かを日本のＮＧＯを通して、使うことを提言したいと思います。

「アフリカ日本協議会」は１０月８日(土)1時より総評会館で国際協力シンポジウムを開きます。テーマは「新生南アフリカと私たち」で"官民協力の可能性を探る"ことが大きな課題となっています。私たちの会の活動が日々、直面している問題がそのままテーマになっています。シンポジウムに積極的に参加し、途上国開発援助について日本の官と民、また日本とアフリカの関係が良い方向へ行くよう協力していきたいと思います。

◆ほぼ２年間に南アへ送った本の数は８月末で43、212冊です。このうち20、204冊はベノニ=デベイトンへ、14、180冊はダーバンへ、後は数箇所の地域にや個人に送ったものです。

◆６月１９日にはＰ.５に松本さんが報告していますが、『マリーの選択』の著者である佐保美恵子さんの講演会を浦和で開きました。直前に出版された著書を読み、感激して来会された方も多く、熱気の溢れる会でした。

◆ＮＨＫ総合テレビ７月３日に「アジア・アフリカと共に歩む会」の活動を取材したものが報道されました。カメラの前で分類や梱包作業をするのはなかなか疲れる仕事でしたが、多くの方々から連絡をいただき、知っていただけて良かったと思いました。

◆今春、南アを訪れた際、日本の中学の英語の教科書が役に立つかどうかを、教科書の行き渡らない黒人の学校の数人の教員に聞きましたところ、「１種類が10冊以上ずつ揃っていれば使いやすいからほしい」という返事でした。そこで再度中学校の教科書を大量に集めるために先日、数１０の高校にお願いの手紙を出したところです。

◆アメリカンスクールにも依頼の手紙を出しました。今少しずつ、うれしいご返事が来始めています。

◆移動図書館用の中古の車を送付する新たなプロジェクトについては、P1に浅見さんが報告していますので、詳しいことは省きますが、送付実現への難題が１つずつ乗り越えられ解決し、送付できる方向へ近付いているのはうれしいことです。

◆先日、ソーラークッキングの研究をされ、国際会議に出席された鳥居ヤス子さんのお話を伺いました。太陽熱を利用して料理をする方法は世界中で研究されています。南アは日照時間と空気の透明度の点でソーラークッキングには適しているということでした。南アは森林地帯が少なく、薪を取りに行くために、だんだん遠くまで足を伸ばさなければならなくなっています。砂漠化防止、生活の改善、からも簡単な太陽熱利用のクッキングがもっと普及することが望まれます。本を送ったり、移動図書館車を走らせたり、という活動と共にいつか鳥居さんの活動とも協力することができればと考えたりしています。

◆待望の倉庫が相次いで２棟落成しました。といっても実は物置ですが、今までシートにくるんでいたのですから大進歩です。

（野田千香子 記）

南アフリカ 自由の声　第６号　　１９９４年９月２０日発行
発行所　アジア・アフリカと共に歩む会
〒338 埼玉県与野市大戸５－１７－１　野田方　　Tel　048-832-8271
Fax 048-832-3607　郵便振替：「アジア・アフリカと共に歩む会」００１００－４－６０８５１５
（9月末までのFaxは 048-858-7625へおねがいいたします。）